

熊本地震を伝える仕事とは

大きな揺れ「まず町へ」

朝日新聞熊本総局は、熊本

続けた。

本城のすぐ南にある。昨年4月14日午後9時26分ごろに最初の地震が起きたころは、総局員の仕事もほぼ終わり、総局員10人のうち当時の堂地志朗総局長ら3人が残っているだけだった。そこへ、大きな揺れ。「とにかく写真」と総局員は町へ飛び出した。

ぐったりして帰宅して、寝込んだ16日午前1時半ごろ、さらに大きな地震が来た。この地震では、総局の壁に掛かっていた時計が傾き、針が止まった。総局では発生直後の1時26分を指しているこの時計を「被災時計」と命名して、当時のままにしている。

その日は、新聞の締切時間の午前2時過ぎまで取材をした。仮眠ののち、15日早朝から夜遅くまで取材を

総局の入っているビルは停電し、水道も出なかった。食糧も尽きかけた。総局員は建物内でもヘルメット姿

で仕事を続けた。飲まず食わずで働き、体重が約3キロも減った人もいた。自分たちも被災しているのに、被災者のためにがんばって働いているのは、忘れてはいけないことを伝えるという強い使命を持っているから、私はそこがすごいと思った。

(朝倉 慧真)

震災を全国発信したい、と元総局長

朝日新聞熊本総局で大地震を体験した当時の堂地志朗総局長は「地震の怖さや、辛い体験を全国の人に知ってほしいし、未来にも語り継いでいきたい」「大地震の瞬間何をすれば身を守るかがわかるような訓練が必要だ」と話した。

てこなかったためだろう」と振り返った。

から、次またどこかで大きな地震が起こったら、支援や助けの言葉は絶対に送ろうと熊本県民のほとんどの人が思っただろう。地震はこわくてつらいかもしれないけど、その体験からまた学ぶこともできると考えることはすごいと私は感心した。

堂地さんは「全国各地で起きてもおかしくない地震だったが、その事実を絶えず全国に発信していくのが、新聞記者の仕事だ」ともいう。堂地さんは「地震を感じたときにとっさに身を守る行動ができなかった」と話した。「瞬時に反応できるだけの避難訓練をし

訓練ではマイクや照明灯を使ったりするが、実際の災害では停電などで役立たないことが多い。自分の命は自分一人ですらなくてはいけないという事を常に考えておくことも必要だ、という。

また、今回の地震の経験



熊本総局の入口には震災を伝える報道写真が張り出されている



震災当時の熊本総局長だった朝日新聞社の堂地志朗さん



4月16日の本震直後の1時26分を指したまま止まっている「被災時計」